
沢木香穂里先生の活報で出された『S』なお題による短編集

抹茶小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沢木香穂里先生の活報で出された『S』なお題による短編集

【Nコード】

N1730X

【作者名】

抹茶小豆

【あらすじ】

「なろう」作家の沢木香穂里先生が活動報告にて出されたお題をジャスト200文字で綴った短編集です。

保険天国、保障が服を着て歩く。

「うちも保険に入りましょう」
妻が夫に言った。

「俺に何かあれば家族が路頭に迷うことになる。よしこれを機に保険にはいろう」

夫は保険に加入した。

「『保険天国』の者です。ご加入ありがとうございます。保険はいいですよ。なにしろ保証が服を着て歩いているようなものですから」
保険のお姉さんはポインだった。
夫の鼻の下が伸びる。

翌日夫は保険会社に電話をした。

「あの、保険はおりますか？ 妻に殴られて全治一カ月なんです」

クリーミー選手権(前書き)

ねずみの嫁入りのパロディーです。

クリーミー選手権

「娘に日本一のお婿さんを貰わなくてはいいかん」
父鼠が言った。

「クリーミー系男子というのが人気だそうだ。では日本でもっとも
クリーミーな男を婿にしよう」

こうして父母の間でクリーミー選手権が開催されることになった。

「要は乳臭いという意味じゃろ？」

「父臭い？ それは加齢臭のことでしょうか？」

母鼠が頭を捻る。

「外見は甘く、キャラはボケよりもソフトなツツコミで加齢臭のす
る日本一の男」

そして思い当たる。

「野田首相」

クリーミー選手権（後書き）

三話以降は沢木先生がお題をくれたら、更新します。
続きをご希望の方は沢木先生に祈りを捧げてください。

祭りは終わらない

高校生活最後の体育祭が終わった。

人気のないグラウンドに佇み、俺は感慨に耽る。

肌に残る熱気とは裏腹に、風に流される紙屑がなんとなく俺をセンチメンタルな気分させた。

「祭りは終わったんだ」

不意に口にした独り言に自嘲する。

「ばーか、終わってねえよ。まだ」

悪友は俺の首に手を回して、俺を引っ張って行く。

その手には、火挟みとポリ袋がしっかりと握りしめられていた。

「美化委員は、これ片付けないと終われねえんだよ」

やさぐれ看護師

「もう私には、夢も希望もないんだから
綾の目に涙が光っている。」

看護師は綾がずっと憧れていた職業。

だからこそ、現実とのギャップに苦しんじゃうのかな？

「看護師が白衣の天使だなんて、夢を描いていたんじゃないでしょ
うね」

あたしは突っぱねるように言った。

「違うわよ！ 異動で女医しかいない部署に配属になったのよ。イ
ケメン医師の嫁になるという私のイタズラな k i s s 計画が」

ナイチンゲールに土下座して詫びると思う。

歩き方が間違っていた。

「うんしょ、うんしょ」

百足さんが歩いていきます。

それは不器用だけれどとても一生懸命な歩みでした。

しかしあるとき思ったのです。

ツイステップをしてみよう……。

「あうっ」

百足さんは転んでしまいました。

「はい、そこ泣かない。ビリでもちゃんとゴールする」
教員の無機質な声がハンドマイク越しに聞こえた。

体育祭の百足競走中にツイステップを試みたチャレンジャーが、後
でチームメイトに吊るされたことは言うまでもない。

鍋がうまい

サークルの皆で鍋をやることになった。

麻子の実家から送って来た豪華な鮭を。

あたしは地元でとれた、京野菜をもってきた。

ぐつぐつと鍋が煮える音と、湯気が部屋に満ちる。

「おいしそう」

皆が鍋を覗きこみ、舌鼓をうつている。

「仕上げはやっぱりこれだな」

そう言つと山形君が徐にタッパーの中身を鍋に入れた。

浮いている。

奴がその姿のままです。

誰もが無言になった。

「なんじゃあ、みんなそんな顔して。イナゴは身体にいいだぞ?」

早いのがとりえ

「鯖は足が早いわねえ……」

冷蔵庫を開けて、母親が溜息を吐いた。

「母さん、鯖は魚類でしょ？ 足なんて生えてないじゃない」

息子が母親を鼻で嗤った。

「あんた知らないの？ 第二次成長期になると生えてくるのよ？」

「嘘」

「嘘じゃないわよ。しかも結構早い。早いのがとりえってくらい

にね」

「どのくらい？」

「そうねオードリーの若林くらいかなあ」

少年は知らなかった。

大人という生き物の80%が嘘で出来ているということ。

再検査。ドキッ

病名告知の衝撃は、よくマンガであるような『ドキッ』なんて生易しいものじゃない。

百万ボルトの電流が一気に体中を駆け巡ったかのような強烈な瞬間の後にやってくる、どこか麻痺した寒くてまっ白な感覚。

「なにかの間違いです。再検査をしてください」
私は先生にすがった。

「いや、そんなの必要ないから。薬塗つとけば治るし」
そう言われてアスタット軟膏をもらったけど、16歳の私にとって水虫の宣告は死の告知にも等しかった。

フライングスペシャル

男がファミレスに入った。

メニュー表の一番上には、でかかど『フライングスペシャル』と書かれてあり、男は興味をそそられた。

注文を聞きに来た店員にその名を告げると張りつめた空気が漂った。

「当店のフライングスペシャルには二通りありまして、一方はちっさいオッサンの天ぷら、柚子胡椒風味でございます」

「いらねーよ！バカっ」

「では、もう一方の方で」

男が頷くと、ファミレスの天井が開き、男の身体は椅子に固定された。

ピクルスの夢

夢を見た。

それは高校時代の酸っぱい思い出。

それはまるでマックで食べるハンバーガーに挟まれたピクルスのような青春の味。

そのとき俺にはすごく好きな女の子がいた。

すごく可愛い子で男子の間では断トツで人気があった。

その子を見ているだけで心臓がバクバクいって、

告白なんて考えられもしなかった。

「高山君ってさあ、なんかピクルスに似てない？」

「やだ、ちよっと似てる〜」

追憶の中で俺の初恋の伊藤さんが、爆笑していた。

デニツシュパンにソフトクリームをのせてみた

それは祖父の臨終の間際のことだった。

一同が見守る中、祖父はかっと目を見開いて起き上がった。

「デニツシュパンにソフトクリームをのせてみた」

パテシエだった祖父は、にっこりと笑ってそれを僕に渡した。

「おじいちゃん……」

僕は言葉を飲み込んだ。

「まあ、良かったわね、健一」

親戚一同が見守る中、僕はそれを頬張った。

涙とともに込み上げる悲しみと吐き気。

(おじいちゃん……それ、ソフトクリームじゃなくて歯磨き粉だよ)

金縛りに遭いたい。

「夜中の二時になると決まって金縛りに遭うわけ」
なんていう友人のお決まりの怪談話にも、俺はちよつと興奮してしまふ。

(金縛り……？ そもそも金縛りって何さ。なんで縛るの？ 金縛りっていうくらいだからやっぱり針金とか？ 針金……針金？ 何それ、超ハードなプレイ)

「で、ああ、またかって思って、薄ら目を開けて見たんだよ。そして、そこに髪の毛の長い女が立ってんの」

(うおー！ なにそれっ、女王様じゃねえか、俺も縛られてえ〜)

誰も見ていないだろう

私は会社のエレベーターに設置されております防犯カメラでございます。

この場所に設置されて、日々皆様の安全を見守ることが私の使命でございます。

今日は元日だというのになんと霧島部長が出勤されております。

走ってきたのでしょうか、なにやら少し汗ばんでおります。

おっと、霧島部長、ポケットからハンカチを取り出した？

そして、額を拭い……え？ズル？

髪の毛が外れた？

いえ、うえっ、ごっほん。

私は何も見ておりませんとも。

二度寝の幸せ

初夢をみた。

それは向井理似のイケメン彼氏ができる夢だった。

(きたきたきたキターーーーーー!!!)

夢の中でやたらとテンションが上がった。

「よっしゃー！ 今年幸先いいわ〜！」

そして続きを見るべくまた眠る。

「君といるととても安心するんだ。

なんか家庭的で、包容力があって、

君にお願ひがあるんだ。こんなことを君に頼むのはとても心苦しいんだけど……」

彼は少し躊躇いがちに続けた。

「お母さんって呼んでもいいかな？」

ファイナリストの冬

「あんた予選を勝ち残ってファイナリストなんだよ。名誉なことじゃないか」

そう言つて母親が布団を引つ剥がそうとするけれど、俺はなんとか抵抗を試みる。

「なにがファイナリストだよ。過疎化が進んで出る奴がないから俺のところに戻って来ただけじゃないか。俺死んでも嫌だからな！無理強いするくらいなら家出する」

自治体よ

あえて言おう

もう無理をするなど。

そして悟れ

そんなことをしても誰も喜びはしないと。

真冬の寒中水泳。

どこから手をつけよう

パテシエの巨匠である杉田さんが、ラブ+の主人公、マナカの等身大フィギュアを砂糖菓子で超精巧に製作したというので、とりあえずネットオークションで落札してみた。

なるほど、さすが巨匠杉田さんの作品である。

まるでゲームの中からマナカが飛び出して、現実の女の子になってしまったかのような錯覚にさえ陥る。

いや……あの、でも、だって、賞味期限とかあるじゃん？

変態とか、別にそんなんじゃないし。

だってこれお菓子だし？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1730x/>

沢木香穂里先生の活報で出された『S』なお題による短編集

2012年1月2日11時48分発行